

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	吉沢 加奈子
論文題目	エスニシティと市民社会 ーインド、ミゾラム州における青年団を事例としてー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、市民社会が民族アイデンティティの構築に果たす役割を、インド・ミゾラム州における青年団組織に焦点を当てて検討した研究である。同州において最大規模のNGOである青年ミゾ協会 (Young Mizo Association: YMA) を対象に、その成立と展開、および現代の活動を通時的に分析することをとおして、YMAが「ミゾ」という民族範疇の形成と再編について果たした役割を明らかにした。</p> <p>序文で本論文の概要を説明した後、第1章「エスニシティと市民社会」では、エスニシティ論、市民社会論、「ミゾ」アイデンティティ形成に関する先行研究を検討し、本論文の仮説を提示した。これまで「ミゾ」アイデンティティの形成をめぐるのは、「ミゾ」を掲げた分離独立運動など政治的要因を重視する学説が主流を占めていたが、本論文においては不断に形成されるアイデンティティ意識に着目し、市民社会における結社の活動、すなわちYMAの活動が「ミゾ」アイデンティティ形成に大きな役割を果たしたとの仮説を立てた。仮説を立証する枠組みとして、エスニシティ論の関係論アプローチを批判的に検討した後、人類学者のアルジュン・アパドゥライが提示したローカリティ概念を手がかりとしてYMAの活動を分析することを提示した。</p> <p>第2章「インド北東地域とミゾラム州」では、本論文の研究対象地域であるミゾラム州をインド北東部全体のなかに位置づけ、その政治・社会的特徴を説明した。インド北東部は、北はヒマラヤ山系、西はアラカン山系に接し、面積の半分以上が森林に覆われる辺境地帯である。森林には山岳部族民が多く居住し、民族的な多様性もインドのなかでも群を抜いている。英領時代は隔離統治が行われてインド平野部と切り離され、これが一つの要因となってインド独立後、分離独立運動が展開された。印中国境紛争後は「北東部」として安全保障上の重要地域とされ、治安部隊と分離独立勢力の暴力的衝突が数多く見られた。ミゾラム州は、こうした北東部の特徴をいわば代表する州であった。</p> <p>第3章「ルシャイ丘陵における市民社会組織の成立と展開」では、英領期からインド独立直後の時期を対象として、YMAの成立と展開を論じた。キリスト教伝道団の青年育成への関心および植民地国家の統治上の思惑が重なり成立したYMA (当初は青年ルシャイ協会) は、「ミゾ」アイデンティティを構築する過程で、「ミゾ」というエスニシティに後進性を見出し、自民族や地域の発展を志向するようになる。その後、第二次世界大戦、そしてインド独立を経たことにより、植民地国家やインドを相対化する視</p>			

点を持つようになり、ミゾ統一党の活動を支援すると同時に、伝統的道德律を強調することによって「ミゾ」により積極的な意味合いを持たせるようになっていった。

第4章「ミゾラム分離独立運動と市民社会」は、分離独立運動期におけるYMAの活動とエスニシティとの関わりについて論じた。ミゾラム州においては、1960年代からミゾ国民戦線による分離独立運動が激化していき、インド政府との武力闘争が拡大した。インド政府は、対策として80%以上の住民を強制移住させ武装勢力の補給を断つことを狙うが、この政策は村落社会を大きく変化させることになった。YMAは、活動を大幅に制限されながらも、武装勢力やインド軍によって破壊された生活の再建に従事し、活動を通じて「ミゾ」アイデンティティの形成により一層貢献した。和平交渉で活躍した政治家の多くはYMAの幹部職を経験しており、YMAは党派の違いを超えて政治との関係を強化していった。

第5章「現代のミゾラム州における市民社会組織とエスニシティの形成」は、「ミゾ」アイデンティティが、伝統的道德律を一つの軸として不断に形成される過程を、現在のYMAの活動実践とこれに対する人々の認識を明らかにすることによって解き明かした。ローカルな単位におけるYMAの活動は、ボランティアとは言い難い側面がある一方で住民のニーズに柔軟に応える形で催事を行っていた。会員達は、時に不満を漏らしながらも「ミゾであること」を伝統的道德律と結びつけ、低地インド人と対比する形で、ミゾへの特別な信頼や安心感を抱いていた。このように、YMAの活動がアパドゥライが概念化した「近接」の活動を通じて「ローカリティ」を構成し、「ミゾ」アイデンティティの不断の構築に大きく寄与していることを例証した。

結論ではこれまでの議論をまとめ、YMAの活動が「近接」の形成を通じて「ローカリティ」の構築に寄与し、曖昧だった「ミゾ」アイデンティティを明確化し、伝統的道德律をミゾの美德として称揚するによってこれを実体化していった、との議論を改めて提示した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、インド北東諸州で最南端に位置するミゾラム州における「ミゾ」アイデンティティの形成に関し、現在、同州で最大規模の組織を有する青年ミゾ協会（YMA）の活動に着目し、市民社会組織がエスニシティ（民族意識）を形成する上で果たした役割を包括的に検証した重要な研究である。本論文の学術的意義は、次の三点に集約することができる。

第一に、研究対象・手法の新しさである。本論文が対象とするミゾラム州は、辺境と目される北東諸州のなかでも辺境に属し、往来の困難さと相俟って研究対象となることが少ない州であった。同州出身者、ないしは北東部出身者による研究が蓄積されるなかで、YMAの活動は相互扶助活動ないし排他的行為のいずれかが強調される傾向にあった。これに対し、本論文はYMAの活動を両側面を統合して俯瞰する観点から、同団体の結成期にまで遡って活動を通時的に分析し、フィールドワークの成果を活用してYMAの市井の活動と市民の認識も併せて検証することで、YMAを包括的に分析することに成功している。日本発の地域研究として、オリジナルな視点と価値を持っている。

第二に、ミゾラム地域研究、インド地域研究への貢献である。「ミゾ」アイデンティティの構築に関しては、これまで「ミゾ」を掲げ自治の拡大を要求する政党の誕生や、自治を超えた独立を要求した武装闘争など政治的要因が果たした役割が大きいとされ、YMAはいわばそれらに付随する存在として背後に隠れる傾向にあった。これに対し本論文は、YMAは後景の存在ではなく、むしろ「ミゾ」アイデンティティの構築に主導的な役割を果たし、その活動と伝統的道德律の称揚によって党派を超えたプラットフォームを形成し、現在でも「ミゾ」としての団結を不断に再構成していることを説得的に議論している。これまで政治の影に隠れていた市民社会の役割の重要性を強調し、立証することに成功したことは、「ミゾ」エスニシティ構築に関する議論に新たな貢献を行っている。

最後に、理論的な貢献である。本論文が用いた理論枠組みは市民社会論とエスニシティ論であるが、まず、市民社会論に関しては、ことインド北東部の文脈においては、エスニシティ形成の観点から議論したことが注目に値する。インド北東部は独立直後から分離独立運動が展開され、インド政府も軍による統治を含めた強権的な手法でこれに対処しようとしたことから、武力紛争の解決が長年にわたり主要な課題となっている。ミゾラムも例外ではなかった。そのため、市民社会論も、紛争解決に果たす役割という観点から議論されることが多かったが、本論文は、1986年のミゾラム和平協定に果たしたYMAの役割という観点ではなく、より広く「ミゾ」アイデンティティ形成を対象としており、市民社会論の射程を広げた。

エスニシティ論に関しては、文化人類学の関係論アプローチを中心として批判的に検

討し、アルジュン・アパドゥライのローカリティ概念を足がかりとして「ミゾ」アイデンティティの形成に迫った。とりわけ、YMAの市井の日常活動とこれに携わる市民の活動、そして市民のYMA認識を分析した第5章は、「近接」の形成が「ローカリティ」の構築に至る過程を闊達に描写しており、ローカリティ概念をより豊かにする貢献を行った。

以上、本論文は、青年ミゾ協会の活動を通時的かつ包括的に検証することにより、市民社会がエスニシティ形成に重要な役割を果たしたことを説得的に論証した。これを通じ、ミゾラム地域研究、インド地域研究、市民社会論、エスニシティ論にも重要な貢献を行った。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年4月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。